

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	(無題)
Author(s)	蔡, 永健
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1997 : 23 - 26
Issue Date	1998-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039380
Right	
Relation	



蔡 永健

芥川龍之介が中国の作品を取材して書いた作品を中心として考察する。

芥川龍之介は一般に理知的な作家だと言われている。芥川の作品の殆どが批評的精神で書かれている。自分のまわりの諸悪、人間の愚昧、偽善などを辛辣な筆法で攻撃する。「鼻」、「羅生門」、「河童」などがそれである。芥川の作品を研究する人は主に「羅生門」などの名作に焦点を絞っている。併し、芥川の中国歴史小説をテーマする作品は多くないと言える。それで「杜子春」、「蜘蛛の糸」など通り、芥川の中国の歴史小説がどういふふうに彼の批評的な精神を貫くのか、他の名作との相違点、また作品のモチーフを考察しようと思う。

「杜子春」などが芥川の一貫しているかと判断すれば、やはりまず芥川は一体どんなものとはっきりさせるはずであろう。ここでわかりやすいように芥川の三つの名作「鼻」、「河童」、「羅生門」を出発点として簡単に説明する。

1) 俗人氣質を批判

「鼻」に於いて、二つの俗人氣質を批判する。一つは内供が長い鼻に悩んでいる理由が生活上の不便ではなく、鼻のせいでまわりの人に笑われる事で自尊心が耐えられないということである。もう一つは内供のまわり人の内供にたいする同情心である。内供の鼻が普通の鼻になると、まわり人は失望の表情を表わす。まわり人の同情心はただの利己主義に過ぎない。

2) 人間嫌悪の情け

「河童」に於いて、芥川は人間に対する嫌悪の情をあからさまにしている。その河童の世界はまったく人間の世界の反映である。それで、「貴様も馬鹿な、嫉妬深い、猥褻な、凶々しい、自惚れきった、残酷な、虫の善い動物なんだろう。出て行け！この悪党めが！」と言う露骨な攻撃は、実は河童でなくて人間に向けられているのである。

3) 許し世界を批判

「羅生門」に於いて、人間の道徳基準がどんなものかと大きな疑いを持つ。「羅生門」に登場する老婆、下人と蛇を売る女がお互いに相手の間違るところを許し合う。相手を許すのは、許してあげると同時に他人から許しを期待している。それが次第にお互いを許せば許すほど、道徳の基準が緩くなって行く。

(2)

「蜘蛛の糸」—エゴイズム対道徳性

この小説は主人公カンダタの慈悲心と醜い我欲（利己主義）をめぐって展開されたものである。カンダタは「人を殺したり、家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥棒」であるが路ばたを這って行く「小さな蜘蛛」を助けるという慈悲心を持っていた。ここから見れば芥川の間人観の一面が窺える。どんな悪人でも、人間である以上、慈悲心を必ず持っているという作者の明るい人間肯定が見える。けれども、カンダタは慈悲心に徹することが出来なかった。「こら罪人どもこの蜘蛛の糸は己のものだ。お前たちは誰の許を受けて、のぼって来た？下りろ。下りろ。」と言ってしまい人間の醜い我欲（利己主義）をはっきりみせる。ここに芥川の間人観のもう一つの面が見出される。前述のように作者は一方では人間の明るい慈悲心を肯定するが、もう一方では、人間がその慈悲心に徹することができないと考えている。

以上の解釈による、この作品のモチーフは理論的には人間が自分を救う力を持っているが、実践的には絶対できないというものである。即ち、人間というものは、自分を地獄から救える素質を持ちながら、その素質に徹しえない弱さも同時に備えている。あらゆる人間が皆その矛盾に悩んで光明と闇の間に徘徊している。釈迦はカンダタを地獄から救おうとしたが、ついに「悲しそうな顔をし」、「浅間しい思」結果になってしまった。小説の釈迦はまったく芥川の化身で、彼が持っている人間と人間性に対する憐憫と嫌悪の複雑な気持が伝わってきた。

「杜子春」—人間性の矛盾と人間の醜悪

この小説は、杜子春と言う主人公が三回天下第一の大金持ちになったのに、三回「友達」に見放された経験と、仙人になろうとしてあらゆる試練に耐えたのについに失敗した二つの部分から構成されるものである。

第一部分では、芥川は他の作品同様人間の醜悪をにくみ、露骨に暴きだしている。小説によると、杜子春は、元はお金持ちの息子だったがお金を使い尽くして所さえなくなってしまった。作品中には、杜子春がお金を何にに使ったか書かれていないが、後の文「洛陽の都に名を知られた才子や美人が多い中で、杜子春の家へ来ないものは、一人もない位になってしまったのです。」から見れば、杜子春が戦国時代の孟嘗君のように、客を招待することが好きな性格を持っていたことが分かる。ところが、一旦貧乏になると「友達」はだれひとりいなくなり、「死んでしまった方がましかも知れない」ぐらい困っていた。ところが、主人公は鉄冠子の仙術のおかげで、また金持ちになって、「路で行き合っても、挨拶さえしなかった友達が、朝夕遊びにやって来る。」が、またしても金を使い果たしもう一回「友達」に見放されることになる。一体、友達というのはなんだろうか。人情というのはなんだろうか・・・作者はこういうことに思わず疑いを抱いているのではないだろ

うか。それで、作者は「河童」のように人間の醜悪にくみ、杜子春の口を借りて「人間は皆薄情です。」と感慨している。ところで、主人公がもはや大金持ちになりたくなく仙人になりたいと思ったわけは、贅沢な生活に厭きたのでもなければ現世の無常を悟ったのでもなく、人間の醜悪から逃げようとしたからであろう。

第二部分は杜子春が仙人になるためにいろいろな試練を受け、ついに約束を破ってしまったものである。鉄冠子と交した「決して声を出してはいけない」と言う約束を守るために、杜子春は「虎と蛇」、「天変」、「神将」などの恐いことを経験させられても、ずっと声を出さなかった。けれども、自分の親が鞭に打たれるのを見て、ついに感情に負け、仙人になる希望を捨ててはらはらと涙を落としながら、「お母さん」と一声叫んだ。約束を破ったので仙人にはなれないが、杜子春は「反って嬉しい気がするのです。」と言う。もしも、鞭を受けている父母を見て黙っていたなら、殺されたかもしれない。ここから、人間性が変わるか変わるまいかというモチーフは現われてきた。つまり、人間のエゴイズムと道徳性の二重性格の闘いといえるだろう。人間性が変わっても（黙って殺される）変わらなくても（声を出し、約束を破る）仙人になれないのである。「人間性そのものを変えないとすれば完全なるユートピアが生まれる筈はない。人間性そのものを変えるとすれば、完全なるユートピアと思ったものも忽ち又不完全に感じられてしまう。」（「侏儒の言葉・ユートピア」）という思想も「杜子春」によく現われている。ようするに、人間性そのものは矛盾であるうえに、極楽は実現できないのである。

「英雄の器」—道徳の価値に対する疑問と俗人の無知

「英雄の器」は「蜘蛛の糸」と「杜子春」によって示された人間性に対する疑問についてさらに考察を深めている。仮に人間は明るい素質を徹することも出来るし、人間の感情を勝てるならば、そのようにするだけのことはあるのかを疑うのはこの小説のモチーフである。この小説の時代背景は楚漢相争の終わり頃である。漢の大将呂馬通と君主の項羽についての談話を通して、プロットが展開する。

作者は比喩手法を利用し、道徳に徹する人を、どうせ失敗だと分かっているにもかかわらず最後まで戦う項羽に化身させる。呂馬通のように一般的な俗人にとっては、項羽の行動ほど馬鹿なことには違いない、勝利のためどんなにことをしても構わないと思えだろう。何故とやら、人間の多くの道徳基準そのものが歪曲されているのだから、本当の道徳は彼らにはおかしいことに思えるのである。残念なことには、現実には、りゅうほうのように天命を知っても尚、戦うものだらうと思うような英雄の器と言える人、真理が分かる人は多くない。むしろ、呂馬通のようなタイプの人ばかりである。芥川はこの事実に対して嘆息するのみである。また、小説の中で結局、成功した人は道徳を徹する項羽じゃなくて、りゅうほうである。つまり、項羽ほど道徳に徹する人は失敗する、なれば、その価値はないので

(4)

はないか。

研究の結論

以上の考察と論述から次のことが分かる。

芥川が人間性信頼から人間性不信に至ったとする見方も、人間性の概念が漠然としすぎているというような見方も分かる。芥川の商品から、切実な厭世観をもって、本能と論理に絡まる普通の人間としてである全く離れた世界に孤独に生きる芥川の肖像も見出されただろう。

芥川龍之介は中国の歴史小説にたいへん興味を持っていることが分かる。翻案された「西遊記」、「水ひょう伝」なども芥川の商品読書になった。29歳の時(大正10年)中国へ行ったこともある。中国の歴史の物語を題材として書いたものも少なくない。芥川の商品を見ると、「酒虫」(大正五年)、「黄梁夢」(大正六年)、「尾生の信」(大正八年)「杜子春」、「秋山図」(大正九年)、「仙人」(大正十一年)・・・中国の古典を基づき築かれたものもけっこうあると言える。

当時翻案された中国小説は沢山あったが、芥川はどうしてこれたの商品を選んで自分の生活体験を小説に溶けませたのか。作者自身の気持とぴったり合わないなら、そういう写実的なものも書けないだろう。以上の分析によると、洗練された神経と、鋭い頭との所有者であった芥川は、人間の心の微妙な動きにたいする驚くべく細かな感受性と緻密な観察力を示した。人間のエゴイズムを見せてくれ、それを批判した「蜘蛛の糸」、生存苦の中で解決する方法を見付けようとした「黄梁夢」、人間の二重性の闘いと人生に迷っているに自分自身を失わないように啓示を与えた「杜子春」・・・いろんな商品をのぞくと、芥川は複雑な人間の気持に対する正しい理解を持っていたことも分かるだろう。人間の心の反応を見逃さない鋭さと敏感さを備えていたことも分かる。